

中央アジア仏教文化研究者としてのオルデンブルグ

マルガリーター・イ・ヴオロビヨヴァ II デシヤトフスカヤ

※本稿は、ロシア科学アカデミー東洋古文书研究所（アジア博物館）刊行の論文集『セルゲイ・フョードロヴィチ・オルデンブルグ——学者・学術研究の組織者』（モスクワ、科学アカデミー、2016年）*Сергей Фёдорович ОЛЬДЕНБУРГ*——*Ученый и организатор науки* (Москва: Наука – Восточная литература, 2016) に掲載された論考 М.И. Воровьева-Деятковская, С.Ф. Ольденбург как исследователя буддийской культуры Центральной Азии の邦訳である。なお「」は邦訳に際しての補注であり、適宜、見出しを付した。

中央・東アジア研究ロシア委員会の設立

セルゲイ・フョードロヴィチ・オルデンブルグ（二八六三—一九三四年）は、十九世紀半ばから世界の学界で活況を呈していた中央アジアの古代文化の研究にきわめて重要な貢献をなした。

中央アジアの歴史の古代期については、長い間、研究が進展しない状態が続いていた。現存する中国とチベットの年代記や古文書、あるいは中国から東トルキ

スタンを経てインドに赴いた古の求法僧の手記によると、紀元後数世紀の間に、この地は、仏教とインド文化の全面的かつ強い影響を受けていた。九世紀末から、タリム盆地はテュルク族の支配下に入ったが、十一世紀初頭になると、東トルキスタンのオアシスのほぼ全域——ホータン、カシュガル、トルファン、クチャ——に、イスラームが普及した。十七世紀になると、東トルキスタンの地域は清朝の統治下に置かれた。地元住民の民族構成が著しく変化した結果、この地域の古来の歴史や文化は事実上忘れ去られていった。

一八七〇年代から八〇年代に中央アジア探検を行ったN・M・プルジエヴァリスキーは、東トルキスタンの物質文化と古代遺跡の研究が最重要課題であることに着目した一人である。G・E・グルムグルジマイロ及びA・G・グルムグルジマイロの調査団も東トルキスタンを踏査した。しかし、最も成果をあげたのが、ロシア地理学協会の調査団であった。それには、G・N・ポターニン（一八八四—五年）、P・K・コズロフ（一八八三年）、M・V・ペフツォフ（一八八九—九〇年）、V・

I・ロボロフスキー（一八九三—九五年）、D・A・クレメンツ（一八九八年）が参加していた。東トルキスタンのオアシスには太古からインド・ヨーロッパ語族が居住しており、紀元後数世紀間インド文化と仏教の強い影響を受けたことが明らかになった。クレメンツが古代インドのブラーフミー文字に似た文字で書かれた仏教写本断簡をペテルブルクに運び込んだ際、未知の文化を研究し記述するという重要な課題がロシアの学者の前に現れた。F・I・シチェルバツキーはこう論じた。「かくも豊かな地域がロシア国境のすぐ近くにある以上、その事実がロシアの調査団によつて発見された以上、そしてすでに我々のもとでインド学研究が蓄積されている以上、ロシアのインド学者にあらずして誰がその研究の義務と榮譽に与ることができよう」[Илебаевский 1935: 25-26]。こうして物質文化遺産の研究と写本の蒐集・発掘のために、東トルキスタンにおける歴史的・考古学的調査を実施する必要性が唱えられるようになった[Ольденбург 1901: IX-XVIII]。ロシア領事のN・F・ペトロフスキーもまたカシュガルが

ら発信した書簡の中でこのことに触れていた。彼は、一八八二年から一九〇三年に東トルキスタンに滞在しながら、古代の住居と寺院の廢墟を発見し、現地住民から大量のインド系文字の写本を蒐集してペテルブルクに発送した人物である。しかし、当時のロシア政府が調査団の組織化を急いで推し進めることはなかった。

一八九九年にローマで行われた東洋学者国際会議において、V・V・ラドロフは東トルキスタン出土の遺物について報告を行った。報告はセンセーショナルな出来事として受け止められ、全ヨーロッパ諸国において東トルキスタンの考古学的踏査に関する特別委員会が設置された。会議の決議によって中央・東アジア研究国際協会が設立された。その三年後、ハンブルクでの第十三回東洋学者大会においてロシアの学者らが立案した協会の定款案が検討された。大会は定款案を承認し、歴史学、考古学、言語学の分野における中央・東アジア研究ロシア委員会の設立をラドロフとオルデンブルグに委任した。委員会への定款には次のように記載された。

中央・東アジア研究ロシア委員会は次の目的を有する…

a 当該諸国に現存する有形物及び精神遺産の研究のためにあらゆる協力を行うこと、

b 地元の関係者及び機関との不断の通信によって、どの遺跡が緊急調査を必要とし、どの民族が近い将来の言語学的、民族学的領域での研究を必要としているか、また同様に科学のための保全を必要としているかを明らかにすること…、

c 当該諸国の諸民族のあらゆる事柄に関して、あらゆる共同研究を行い、かつ共通の学術的諸課題に関する検討を行う計画を立案すること、

d すべての学者が、国籍の如何を問わず、委員会の活動する地域において今後の学術研究に参加できるように便宜を図ること」[Orbenthypr. 1903: 45]。

他国に遅れた最初の調査

委員会には、調査団を組織しフランス語で報告書を出版する権利が与えられた。委員会の最初の指導部には、ラドロフ、V・A・ジューコーフスキー、V・V・バルトリド、さらにL・Ya・シユテルンベルグが参加した。

中央・東アジア研究ロシア委員会が計画した東トルキスタン踏査は、M・M・ベレゾフスキーがクチャに出發した一九〇五年になってはじめて組織された（詳細は「Boposera-Jecuroncka 2008; Popova 2015」を参照）。彼の調査は一九〇七年まで続いた。オルデンブルグは一九〇九―一〇年になってようやく東トルキスタンに出發することができた。このときまでに、東トルキスタンではすでに西ヨーロッパ諸国と日本の学者等による探險隊が何度か成功裏に踏査を行い、現地から、写本や塑像、果ては寺院や僧院の壁から丸ごとはぎ取ったフレスコ画さえ運び出していた。いかなる国際協定も歯止めにならなかった。そのため、事実上、オルデンブ

ルグには手つかずの遺跡は一つとして残されておらず、「手ぶらで帰国」せざるを得なかったのである【Илебаевский 1935: 26】。しかし、最初の調査を行う以前に、すでにオルデンブルグは、他のロシアの調査団が東トルキスタンから運び出した写本や、ペトロフスキーが發送した写本の記録や解読、学術刊行物への紹介といった膨大な仕事を行っていた。

イギリスやフランス、そしてドイツの学者たちが入手した写本は、ロシアで見つかった写本と同じ諸言語、同じ系統の文字で書写されていたので、あらゆる国の学者たちの前にそれらを解読し言語を特定するという課題が現れた。それに取り組むためにヨーロッパとロシアの最高峰の学者——インド学、イラン学、チベット学、中国学、トルコ学——の代表が動員された。古文書と言語を特定する研究には、ロシアの学者の中から、オルデンブルグのほかに、N・D・ミロノフとA・フォン・スタール・ホルシユタインが参加した。様々な年に、P・ペリオ、E・シャヴァンス、L・de・la・ヴァレ・プーサン、E・セナール、H・リュエーダー

ス、F・W・トーマス、R・ヘルンレ、S・レヴィ、A・マスベロ、S・コノウ、A・G・フランク、H・W・ベイリ、W・B・ヘニング等の学者が研究に参入した [Bailey 1972: 99-110]。

写本研究——未知の言語に直面

オルデンブルグは、一八八〇年代の終わりにペトロフスキーによってカシユガルから発送された写本一葉を世界で最初に発表した人である。それは一八九二年に『ロシア帝国考古学協会東洋支部報告』に掲載された [Ольденбург 1893: 81-82, I табл.]。写本の文字はオルデンブルグによって斜体ブラーフミー文字と特定された。ブラーフミー文字のこの書体はそれまで知られていなかった。インドでは、インドのブラーフミー文字で書かれた写本断簡がいくつか発見されていた。中央アジアではインドのブラーフミー文字は現地の諸言語で使われ、かつ二種類の書体が用いられた。つまり、一つは中央アジア系直立ブラーフミー文字で、カシユガルとホータンで発見された写本であった。もう一つ

は、中央アジア系斜体ブラーフミー文字であり、これは明らかに北方オアシスのトルファンとクチャで広まっていたと考えられる。オルデンブルグは写本の解読に成功し、それがサンスクリットでなく、未知の言語で書かれたものであることを究明した。一八九二―九三年の冬、彼はペトロフスキーから百葉以上の写本とクチャ、コルラ、アクスー出土の写本断簡を受け取った。それらの中には、紙本と権皮写本があった。オルデンブルグは、写本資料を化学分析に出し（紙の成分は主に中国産桑と他の地域の灌木であることが解明された）、写本の様式（インドの貝葉形）を記録した。オルデンブルグはペトロフスキーから受け取った写本を一八九三年から一九〇三年まで、『ロシア帝国考古学協会東洋支部報告』で定期的に発表した。その多くの部分がテキストのローマ字版と写真版から構成されていた。写本の中の若干のものだけが内容の比定に成功した。西ヨーロッパの学者たちも、彼らが自由にできるかなりの量の写本を自分たちの発見物として発表し始めた。ロシアと西ヨーロッパ諸国に、同一写本の別の部分

や、時には同じ内容の写本がもたらされることがあった。

写本に使われた言語に関して活発な議論が行われた。写本はサンスクリットのほかに、インド・ヨーロッパ語系の未知の三つの言語で書かれたテキストを含んでいることが解明された。おもにホータンで発見された写本の一つは東イラン語に比定され、ホータン・サカ語と名付けられた（古来、ホータンに基盤を築き上げていたイラン系の人々、すなわち前一千年初頭乃至二千年期前半から中央アジアに入り始めたイラン系言語を話す遊牧民族が、これらの言葉を使用していたことは明らかである）。別の二つの言語はトルファン、カラシャール、クチャの各オアシス地域に広まっていた。オルデンブルグが一八九二年に発表した写本は、これらの言語のうちのひとつで書かれていた。翌年、ヘルンレはA・ウエーバーのコレクションから類似の写本を発表し〔Hoentle 1893: 1-10〕、他方、E・ロイマンは一九〇〇年にこれらを再版するとともに、ベトロフスキー・コレクションの写本一〇を出版した〔Leumann 1900: 1-28, 2 tabl.〕。未知

の言語はトカラ語と名付けられ、トカラ語A（トルファンとカラシャールの言語）として表記され、クチャ出土の写本の言語は、トカラ語Bまたはクチャ語と名付けられた。両言語は互いに近似の關係にあり、異なる方言である可能性もある。これら言語を母語とする人々はトカラ人やイラン系サカ人であり、彼らはおよそ前二千年期にそれぞれ東トルキスタンの地域に流入した。紀元後数世紀までは、トカラ人もサカ人も、おそらく、文字をもたない人々であったであろう。つまり、東トルキスタンの歴史を通じてインド系部族と直接的な接触は続いてきたものの、インド起源の文字（ブラーフミー文字）が彼らに受け入れられたのは、仏教及び広範なインド文化の流入にともなって、それらを記述するためだったと考えられる。

オルデンブルグは写本の言語の特定、文書の解説、そして仏典やそれ以外の作品の比定において著しい貢献をなした。彼の著作物には『ロシア帝国考古学協会東洋支部報告』で発表された次のテキスト類がある。

I—テキスト 1—九番〔OrslenGypr 1894: 47-67, 2

табл.】Ⅱ—テキスト十一—十二番 [Ольденбург 1899: 207-264, 2 табл.】Ⅲ—テキスト十五—十九番¹⁾ [Ольденбург 1904: 0113-0122, 3 табл.】。オルデンブルグは、一八九七年発行の同誌別冊において、カシユガル出土のカローシユティー文書桦皮写本の写真を発表した [Ольденбург 1897]。これは、ブラークリット語による『ダルマバダ (Dhammapadam)』テキストであった。彼は、ローマ字翻字とロシア語訳を付したこの写本テキストの出版を計画し、将来に向けて準備を行っていたのだが、その後の社会的・組織的活動の多忙がその完遂を妨げた。シチュエルバツキーは、このテキスト出版について、完成されたものとして、書いている [Шербарский 1935: 21]。オルデンブルグは、『ロシア帝國考古学協会東洋支部報告』に全部でサンスクリット写本およそ四〇葉と複数の断簡を発表した。それらは異なる内容の二十四の作品であり、五つは未特定として発表された。オルデンブルグは、自身の発表のほか、外国で発表された著作物の紹介を行い、読みと翻訳の正確性を論評し、自らの修正案を提示し、さらに

各国が所有する同一写本の各部分を統合する必要性を強く説いた [Ольденбург 1900: 028-036]。オルデンブルグは、自身の論考やスピーチのなかで、東トルキスタン将来のすべての写本と断簡が、個別のシリーズで、つまりテキストの写真版、翻字、解説、ロシア語訳、写本に表れたサンスクリットとブラークリット語の多様性に関する研究などに分けて出版されなければならぬことを繰り返し述べていた。彼がこの課題の実現に向けて準備していたことは、写本用の書類入れに残る彼のメモ書きが証明している。それらはロシア科学アカデミー東洋古文書研究所にある膨大な翻字資料入れの中に保管されている。

トカラ語テキストの研究には、ミロノフも参加した。彼は、ベレゾフスキー・コレクションから、『ダルマバダ』のテキストがサンスクリットとクチャ語で併記された、クチャ出土写本断簡を発表した [Миронов 1910: 547-562]。これらの問題には、トカラ語に関する論争に加わった A・フォン・スタール・ホルシユタインが関心を示した [Stael-Holstein 1909: 482-484]。

第一次東トルキスタン調査

オルデンブルグは、東トルキスタンへの自身の調査の準備を行いながら、すでに研究者たちが手にしていた資料の文献言語学（フィロロジ）的研究の重要性を

強調した。その際、彼は調査地における出土遺物の大量さと新奇さによって、「遺跡の研究に取りかかったものの、あたかも、影たちだけが動いている舞台を見ているようなもので、そこには私たちが理解できる思想、感情をもった生きた人間の存在はなかった…」という気持ちにさせられたと書いている [Ornrehypr 1918: 2054]。彼は常に文献言語学を第一義においていた。従って、彼の考古学調査の日誌が整理されなまま残っていたのは、おそらく、仕方のないことだったのであろう。

オルデンブルグは、一九〇九年、中央・東アジア研究ロシア委員会の資金による調査団を率いて、東トルキスタンまで到達することができた。調査団には写真家で画家の S・M・ドゥディンと測量技師 N・A・ス

ミルノフの参加も受け入れた。踏査は、カラシャフルートルファンーカラシャールーコルラクチャーバイーアクスーウチ・トルファンーカルピンーマラルバシーカシユガルの経路で行われた [中央・東アジア研究ロシア委員会記録]。

オルデンブルグが最初に足を踏み入れた時から、「学者たちはみなすでにベルリンにいて、新しい資料にむさぼりついて研究しているのに、何のために彼はトルキスタンまで来てしまったのか」ということが明らかになった [Иппарков 1935: 26]。現地は、考古学的観点からは何も残っていなかったもので、調査は「実地踏査のようなもの」、「もこ」と言えば、「よい結果は出そうにない実地踏査のようなもの」であった。それでもなお、全経路に沿って研究対象遺跡の総合的調査が行われた。平面測量調査、写真撮影、スケッチ（素描）、詳細な記録などである。調査団によってもたらされた資料は、今も未発表のままである。オルデンブルグは短い略報告だけを発表した [Ornrehypr 1914]。調査団はすでに西ヨーロッパの探検隊が地図に記録した様々な

考古学的遺跡の平面図、写真、描画、トレース図からなる膨大な資料を持ち帰った。これらはすべて重要な学術的価値を有している。当時発見されたばかりで、まだ崩壊しておらず、完全には盗掘されていない遺跡であり、それらについての研究の初期段階を記録しているからである。状態の良い塑像やフレスコ画はすべて西ヨーロッパに運び出され、遺跡そのものの完全な記録文書はヨーロッパにあったのだが、いずれも発表されることはなかった。オルデンブルグは、ヨーロッパの学者たちが本格的な発掘を行わず、地表での採集だけを行い、石窟や寺院の平面図を作成せず、専ら写本だけを探し回ったことを、たびたび指摘した。彼らの調査では一大発見を露骨に追いつめる風潮があった。したがって荒らされた遺跡についてオルデンブルグ調査団がなした研究成果は、今に至るまでその意義は失われていない。ゆえに、今日、国立エルミタージュ美術館、科学アカデミー文書館サントペテルブルク支部、同アカデミー東洋古文書研究所に保管されている資料は速やかに出版を行う価値を有している。エルミ

タージュの研究員は、それらの出版に向けた準備を開始した（実際は、若干遅れている）。最初の刊行物『シクシン』はN・V・デイヤコノヴァによって準備され、公刊された〔Дьяконова 1995〕。『トルファン』『クチャ』『ベゼクリク』といった続いての刊行に向けた作業は、残念ながら、彼女の逝去によって中断されてしまった。

第二次東トルキスタン調査

一九一四―一五年に実施されたロシア第二次東トルキスタン調査にあたり、オルデンブルグはあらかじめ別のやり方を準備した。彼は、自分で一つの遺跡の調査を予定していたのだ。それは、文献資料でよく知られ、ヨーロッパの調査団が研究を行い、学術研究で「千仏洞」と名づけられた莫高窟であった（中国語で〇窟^〇洞^〇莫^〇高^〇窟^〇。オルデンブルグは自身の日記に「チャン・フォ・ドウ^〇 Chan-fo-dou^〇」と書いた）。遺跡は（中国）甘粛省敦煌市近郊に位置していた。遺跡の総合的記録と研究を目指した調査団の目的に関して、オルデンブルグは、現在科学アカデミー文書館に保管されている備忘録に次の

ように書きとめた。「中国及び中国領トルキスタンの仏教芸術遺跡の編年を特定するための確固たる根拠を見つづけること、そしてこの芸術の多種の様式の特徴づけを行うために十分な資料を蒐集すること」と⁽²⁾。

当時のヨーロッパの考古学者とは異なり、オルデンブルグは、仕事上の厳格なる原則を遵守していた。すなわち、調査対象のいかなる破壊も行わないこと、壁から何もはがさないこと、フレスコ画を取り外さないこと、塑像を運び出さないこと、すべてを写真に収め、スケッチし、トレースし、記録を行うこと、そして、持ち出すのは自然に経年劣化したものや、先行する調査団が捨てたものだけに限ること、であった。調査団には、第一級写真家で芸術家のS・M・ドゥディン [Ольденбург 1930: 341-358]、画家V・S・ビルケンベルグ、測量技師N・A・スミルノフ、地理学者B・F・ロムベルグが参加した。この調査団の資料は、オルデンブルグの第一次調査団の資料と同じく、ごく僅しかか公刊されていない。オルデンブルグは三本の小論考を発表しただけだった [Ольденбург 1921; 1922; 1925]。

二本の論考(個別的問題に関するもの)を、ドゥディンが発表した。日誌と石窟の記録に関しては、長く発表されなかった。国立エルミタージュ美術館に保管されている資料に基づいて、N・V・デイヤコフは二本の小論考を発表した。一つは具体的問題(敦煌出土織物)を取り上げ、もう一つは概説的内容である [Льяконова 1947: 445-470]。この調査団が関係するすべてに何らかの宿命がまわりついでるのであるか。次世代の学者たちによる団の記録さえ一九九三年まで公刊されなかったのである。ここでは二本の論考を紹介しておこう。一九五〇年代初頭に完成したP・E・スカチコフの「ロシア・トルキスタン調査団 一九一四―一九一五年」[Скачов 1993: 313-320]と、その論考を正したL・N・メンシコフの「ロシア・トルキスタン調査団 一九一四―一九一五年の資料の研究のために」[Меншиков 1993a: 321-331]。より詳細な概説は以下を参照せよ [Лопова 2008: 158-175]。調査団の行路と団員に課せられた具体的課題に関して、スカチコフは次のように書いている。「石窟全体の正確な平面図、石窟の各階毎

の平面図、断面図、正面図を作成し、遺物の写真撮影を行い、最も重要な作品を模写し、あらかじめ定められた計画に基づき、可能な限り石窟のより詳細な記録を行うことが考えられていた。調査団の経路はチュグチャク・グチェン・ウルムチーアンシー・ハミータン・フォドン（敦煌の「千仏洞」）であり、復路では敦煌を通過し、柳園經由でハミに戻った」〔Скачков 1993: 315〕。

調査団は一九一四年五月二〇日にペテルブルクを出発し、八月十五日に「千仏洞」に到着した。石窟の記録に三カ月を費やした。その際、調査団は石窟に新たに番号を付すことはせず、一九〇八年作成のペリオの平面図に記された窟番号に準ずることに決めた（ペリオが作成した莫高窟の記録は後年、発表された〔Pelliot 1920-1924〕。ペリオの敦煌滞在の後に開放された三つの石窟は、A、B、Cと標示された）。記録作成後、石窟の壁画の細部にわたる調査、写真撮影、粗描、壁画のトレース等の作業が行われた〔Скачков 1993: 316-317〕。石窟内の残骸の清掃や床面の部分的発掘の際に、時間とともに自然

崩落した壁画断片や塑像断片、古写本断簡が発見された。これらはすべて、入念に収集、梱包されて、ベトログラード（サンクトペテルブルク）に届けられた。オルデンブルグのフィールド・ノートには写本の発見について記録されていた。⁽³⁾ 写本はクリーニング及び修復の後、ロシアの学者らに提供されたが、五十一世紀にわたるおよそ二万点の中国語の写本断簡であることが判明した。幾つかの断簡と約二百巻の写本は地元住民から購入された。⁽⁴⁾ 現在、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所のコレクションには三八六巻の完全な写本が存在する。敦煌将来写本の研究はロシアにおいて、一九一〇年代後半に始まるが、体系的研究は一九五七年以降に行われた。L・N・メンシコフが率いた研究班は『中国敦煌写本総録』〔Описание Дуньхуанского фонда 1963: 1967〕二巻本を公刊した。オルデンブルグ調査団による敦煌出土資料についての研究論考は、メンシコフ作成の目録によると、およそ百三十タイトルの上に〔Меньшиков 1993b: 344-355〕。

ロシア第二次東トルキスタン調査は一九一五年一月

まで続けられた。すべての作業が第一次世界大戦の開始によって中止になった。一九一七年の十月革命後、科学アカデミーには学術研究の改革という新たな課題が提起され、その組織化の業務によって、オルデンブルグは忙殺された。その結果、彼が二十年近く周到に準備してきた、調査団資料の発表に向けた仕事から遠ざかることになった。多くの国の学者たちがこれらの資料の発表を待ち望んでいた。オルデンブルグはそれらの出版について外国から何度も勧められたが断り続けた。今振り返ると、それらが出版されていれば、明らかに、A・スタインの《Ancient Khotan》(「古代コータン」)や《Innermost Asia》(「極東アジア」)に劣らぬ国際的評価を得たであろう。

オルデンブルグの研究資料

オルデンブルグは写本のほかに今日国立エルミタージュ美術館に所蔵されている古遺物と仏教美術品をロシアにもたらした。これらは壁画、塑像、織物の一部であり、仏教儀礼用具である(詳細はロシア科学アカデ

ミー文書館保管のオルデンブルグによる報告書草稿にある⁽⁵⁾。それらは修復され、部分的には復元されている。資料は断片的であるにもかかわらず、敦煌で研究してきたペリオが、これらの展覧会を観て、その価値に文字通り驚愕したほど重要なものであった [Илегаревич 1935: 22]。これらの遺物を基にした東トルキスタン芸術の研究には、エルミタージュ美術館の研究者たちが従事してきた。同美術館の古文書館にも、ロシア第二次東トルキスタン調査団に属する、二千点の写真、ネガ、粗描などが保管されている。

オルデンブルグ、ドゥディン、ロムベルグ、スミルノフの旅行記録は、調査団の記録文書の重要な部分を構成している。それらは、ロシア科学アカデミー文書館サンクトペテルブルク支部に保管されている(参208)。

一九三八年、科学アカデミー常任委員会は、「生前に」オルデンブルグが作成した石窟の記録の出版準備のために資金を割り当てた。シチュエルバツキーが作業の先頭に立った。彼の指導に基づいて、オルデンブルグの

未亡人、E・G・オルデンブルグはタイプ印刷に回すための手稿を準備し、記録の不明箇所に関してはO・A・クラウシユが解読した。画家のM・C・ハルトウーリンが平面図と絵を模写した〔Скитков 1993: 318〕。タイプされた原稿は「ノート六冊分」（六つのフォルダー、計八三四枚）に及んだ。オルデンブルグ夫人は調査団資料（エルミタージュ美術館所蔵）を閲読し、写真とネガ（およそ二千点）を六冊のノート毎に整理した（写真番号は各ノートの末尾に記載されている）。タイプされた原稿は二度、手稿と照合された。

記録文書は精密な構成で編成された。石窟の様々な場所——入口近く、窟頂（天井）、壁（入口の左右の壁）、壁龕——に配置されていたすべての塑像とフレスコ画は、数字と文字で標記され、各石窟の記録には表記の統一が図られた。すべての図像は様式と彩色に基づいて記述されている。これらの製作年代について暫定的結論が示された。多くの図像と塑像について仏教上のいかなる聖像なのか比定がなされ、詳細に記録された。オルデンブルグの記録によって調査の初期における石

窟の概観を復元できる。その時代以降、敦煌ではすべてが変貌して、オルデンブルグの調査団の後、多くの図像と塑像が西ヨーロッパに持ち出された。それに加えて遺物は地元住民が石窟とその物資を長期間にわたって利用したことで失われた。

オルデンブルグは、考古学者たちがインドや中央アジアで発見した遺跡を基礎資料として、仏教芸術——塑像、壁画、図像学——の研究のために多くを成し遂げた。ブロックハウス・エフロン百科事典（第八巻、サングトペテルブルク、一八九二年刊、四一〇—二〇頁）に収載された論考「仏教芸術」を含め、通算して芸術に関するおよそ五〇本の論文が彼の筆になるものである。

総じてオルデンブルグの研究は、伝統的な仏教の観点から仏教図像を精密に調査した点に特徴がある。つまり、（如来像・菩薩像等の）ポーズや印相、持物、配置などを詳述したのである。それらは、考古学者が中央アジア地域の仏教遺跡から発掘された図像や塑像、あるいは、様々な種類の小像、テラコッタ像、チベット、モンゴル、ブリヤート派のタンカ（仏教画の掛け軸）や

図像について同定するための参考資料となるものである。この領域では、チベット、モンゴル、東トルキスタンの美術に関する彼の研究がとりわけ興味深い。東トルキスタン美術の分野でオルデンブルグは、ロシアに限らず、ヨーロッパにおいても最も傑出した専門家であると評価されていた。

東トルキスタンにおける写本の発見のおかげで、かつて失われた、あるいは漢訳やチベット語訳でしか現存しないと考えられていたサンスクリットの聖典群がはじめて学界に紹介されたのである。テュルク諸語による仏教写本も発見された。発見された諸テキストの同定にあたり、チベット語訳や漢訳の仏教聖典が広く利用されたが、これらも写本や木版の形でしか存在しなかった。今後の仏教研究には、あらゆる言語——サンスクリット、チベット語、中国語あるいはウイグル語——による基礎的な仏教テキストについての確実な基礎知識を必要とし、時にはそれらの言語すべての知識が直ちに必要である。同内容のテキストの異言語への翻訳を比較することによって、仏教文化形成の歴史

を、様々な専門家が研究する道が拓かれたのである。

注

- (1) No.13とNo.14はS・F・オルデンブルグが後に発表を予定していたこのテキストのため省かれている。
- (2) СПбФ АРАН. Ф. 208, оп. 1, ед. xp. 188.
- (3) СПбФ АРАН. Ф. 208, оп. 1, ед. xp. 172. Д. 97-98.
- (4) АВИБР РАН. Ф. 32, оп. 2, ед. xp. 24; Попова 2008: 168.
- (5) СПбФ АРАН. Ф. 208, оп. 1, ед. xp. 188/ К. 10.

参考文献

- Воробьева-Деслятовская 2008 — Воробьева-Деслятовская М.И. Экспедиция М.М. Беззубовского в Кучу (1905–1908) // *Российские экспедиции в Центральный Азия в конце XIX — начале XX века. Сб. статей / Под ред. И.Ф. Поповой. СПб.: Славия, 2008. С. 65-74. [ウキロゴロウマ=チンヤトフスカヤ] M・M・ベレゾフスキーのクチャ調査 (1905–1908) [「十九世紀末—二十世紀初頭の中央アジアにおけるロシア調査隊」]*
- Дьяконова 1947 — Дьяконова Н.В. Буддийские памятники Луньхуана // *Труды Отдела Востока Государственного Эрмитажа. 1947. Т. 4. С. 445-470. [チンヤロノウマ] 仏*

教遺跡敦煌』『国立エルミタージ美術館東洋部紀要』]

Дьяконова 1995 — Дьяконова Н.В. Шикшин. *Материалы Первой Русской Туркестанской экспедиции академика С.Ф. Ольденбурга. 1909-1910 гг.* М.: ИФ «Восточная литература» РАН, 1995. [「キヤロフ・フ・オルデンブルグのロシア第一次東トルキスタン調査団資料」]

Меньшиков 1993a — Меньшиков Л.Н. К изучению материалов Русской Туркестанской экспедиции 1914-1915 гг. // *Петербургское Востоковедение*. 1993. Вып. 4. С. 321-331. [「メンシコフ「一九一四—一九一五年のロシア・東トルキスタン調査団資料の研究」『ペテルブルグの東洋学』]

Меньшиков 1993b — Меньшиков Л.Н. Список работ по дуньхуановедению, опубликованных российскими учеными // *Петербургское Востоковедение*. 1993. Вып. 4. С. 344-355. [「メンシコフ「ロシアの研究者による敦煌学研究便覧」『ペテルブルグの東洋学』]

Миронов 1910 — Миронов Н.Д. Из рукописных материалов экспедиции М.М. Березовского в Кучу // *Mélanges Asiatiques tirés de «Bulletin» de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Petersbourg*. Т. XIV. 1909-1910. СПб., 1910. P. 547-562. [「メロンフ「М・М・ベレンフスキーのクチャ調査の写本資料より」]

Ольденбург 1893 — Ольденбург С.Ф. Каптарская рукопись

Н.Ф. Петровского I // *Записки Восточного отделения Императорского Русского Археологического общества* (ЗВОРАО). 1893. Т. VII. С. 81-82. 1 табл. [「オルデンブルグ「Н・Ф・Петроフスキー將來カシユガル写本1」『ロシア帝國考古学協会東洋支部報告』]

Ольденбург 1894 — Ольденбург С.Ф. Отырки кашгарских санскритских рукописей из собрания Н.Ф. Петровского // *ЗВОРАО*. Т. VIII. 1893-1894. С. 47-67. [「オルデンブルグ「Н・Ф・Петроフスキー蒐集カシユガル出土サンスクリット写本断簡」『ロシア帝國考古学協会東洋支部報告』]

Ольденбург 1897 — *Ольденбург С.Ф. Предварительная заметка о буддийской рукописи, написанной письменами Kharoshīhi*. (Издание факультета восточных языков Императорского Петербургского университета ко дню открытия XI Международного съезда ориенталистов в Париже). СПб., 1897. 6 с. 2 табл. [「オルデンブルグ「カローシユチエー文字で書かれた仏教写本に関する予備的短評」(パリでの第十一回國際東洋学者大会開催を記念した帝國サンクトペテルブルク大学東洋語言学部)の出版物」]

Ольденбург 1899 — Ольденбург С.Ф. Отырки кашгарских санскритских рукописей из собрания Н.Ф. Петровского // *ЗВОРАО*. 1899. Т. XI. 1897-1898. С. 207-264. 2 табл. [「オルデンブルグ「Н・Ф・Петроフスキー蒐集カシユガル出土サンスクリット写本断簡2」『ロシア帝國

考古学協会東洋支部報告』

Ольденбург 1900 — Ольденбург С.Ф. [Рец. на:] Нюпле R. The Bower Manuscript. Calcutta, 1897. // *ЗВОРАЮ*. Т. XII. 1900. С. 028-036. 「オルデンブルグ」ハルビン著論考の書評』
 『ロシア考古学協会東洋支部報告』

Ольденбург 1901 — Ольденбург С.Ф. Записка о снаряжении экспедиции с археологической целью в бассейны Тарима (Совместно с Н. Веселовским и Д. Клеменцем) // *ЗВОРАЮ*. 1901. Т. XIII. 1900. С. IX-XVIII. 「ハルビントルグ」タリム盆地における考古学調査の裝備に關する覚え書』、『ロシア帝國考古学協会東洋支部報告』

Ольденбург 1903 — Ольденбург С.Ф. Русский комитет для изучения Средней и Восточной Азии // *Журнал Министерства народного просвещения (ЖМНП)*. 1903. Ч. 349, № 9, отд. IV. С. 44-47. 「オルデンブルグ」中央・東アジア研究ロシア委員会』、『人民教育省ジャーナル』

Ольденбург 1904 — Ольденбург С.Ф. Огрызки кашгарских санскритских рукописей из собрания Н.Ф. Петровского III // *ЗВОРАЮ*. 1904. Т. XV. 1902-1903. С. 0113-0114. 3 табл. [N. F. Петровский 蒐集カシユガル出土サンスクリット写本断簡3』、『ロシア帝國考古学協会東洋支部報告』

Ольденбург 1914 — Ольденбург С.Ф. *Русская туркестанская экспедиция 1909-1910 г. Снаряженная по Высочайшему повелению состоящим под Высочайшим Его Имп.*

Величества покровительством русским Комитетом для изучения Средней и Восточной Азии. Крайний предварительный отчет. С. 93 табл., 1 планом вне текста и 73 рис. и планки в тексте. Фотографич и рисунки художника С.М. Дудина и планы инженера Д.А. Смирнова. СПб.: Типография Имп. академии наук, 1914. 「ハルビンブルグ」ロシア・東トルキスタン調査団 一九〇九—一九一〇年』

Ольденбург 1918 — Ольденбург С.Ф. Валентин Алексеевич Жукковский. 1858-1918. Попытка характеристики деятельности ученого. (Читано в заседании ОИИФ 17 января 1918 г.) // *Известия РАН*. VI сер. Т. XII. 1918, № 18. С. 2039-2068. 「ハルビンブルグ」サアレメンチン・アレクセエヴィッチ・シムコロフスキー。一八五八—一九一八年。学者の研究活動の評価の試み』、『ロシア科学アカデミー紀要』

Ольденбург 1921 — Ольденбург С.Ф. Русские археологические исследования в Восточном Туркестане // *Казанский музейный вестник*. 1921. № 1-2. С. 25-30. 「ハルビンブルグ」東トルキスタンにおけるロシア考古学研究』、『カザン博物館報』

Ольденбург 1922 — Ольденбург С.Ф. Пещеры тысячи Будд // *Восток*. 1922. Кн. I. С. 57-66. 6 л., илл. 「ハルビンブルグ」千仏洞』、『東洋』

Ольденбург 1925 — Ольденбург С.Ф. Искусство в пустыне //

30 дней. 1925. № 1. 「オルデンブルグ」砂漠の芸術』「三十日』」

Ольденбург 1930 — Ольденбург С. Ф. Памяти Самуила Мартьяновича Дудина // *Сборник Музея антропологии и этнографии*. 1930. Т. IX. С. 353-358. 「オルデンブルグ」サムイラ・マルティノヴィッチ・ドゥッティンの思ひ出』「人類学・民族学論集』」

Описание дунхуанского фонда — *Описание китайских рукописей Дунхуанского фонда Института народов Азии* / [Коллектив авторов] под ред. Л. Н. Меньшикова. Вып. 1. М.: Издательство восточной литературы, 1963; Вып. 2. М.: Наука. ГРВИ, 1967. [『マニチン民族研究所中国敦煌写本総録』第一卷、第二卷]

Попова 2008 — Попова И. Ф. Второя Русская Туркестанская экспедиция С. Ф. Ольденбурга (1914-1915) // *Российские экспедиции в Центральную Азию в конце XIX — начале XX века*. Сб. статей / Под ред. И. Ф. Поповой. СПб.: Славия, 2008. С. 158-75. 「茶茶ロの・丘・オルテンブルグのロシア第二次東トルキスタン調査団（一九一四—一九一五年）」『一九世紀末—二〇世紀初頭におけるロシアの中央アジア調査』」

Протокола РКСА—Протоколы заседаний Русского комитета для изучения Средней и Восточной Азии в историческом, археологическом, лингвистическом и этнографическом отношении. 1909. Протокол № 3, 22 сентября, §

49. 『歴史学、考古学、言語学、民族学に関する中央・東アジア研究ロシア委員会公議議事録』」

Скачков 1993 — Скачков П. Е. Русская Туркестанская экспедиция 1914-1915 гг. // *Петербургское Востоковедение*. 1993. Вып. 4. С. 313-320. 「ド・Э・スカチコフ『ロシア東トルキスタン調査団一九一四—一九一五年』」

Щербатской 1935 — Щербатской Ф. И. С. Ф. Ольденбург как инданист // *Записки ИВ АН СССР*. 1935. IV. С. 23-30. 「シチホルンツキー『インダ学』の・丘・オルテンブルグ』『シテルブルグ東洋学』」
Bailey 1972 — Bailey H. W. A Half-century of Irano-Indian Studies // *JRAS*. 1972. No. 2. P. 99-110.

Hoernle 1893 — Hoernle R. The Weber Manuscripts // *Journal of the Royal Asiatic Society of Bengal (JRASB)*. 1893. Vol. 62, pt 1. P. 1-40.

Leumann 1900 — Leumann E. Über eine von den unbekanntesten Lietausprachen Mittelasiens // *Mémoires de l'Académie Imp. des Sciences de St.-Petersbourg*. 1900. Ser. 8, t. IV, No. 8. S. 1-28, tafel 1, 2.

Reilott 1920-1924 — Reilott P. *Les grottes de Topen-Hoicang* (Buddhist paintings and sculptures of the Wei, Tang and Song periods). T. 1-6. Paris: Geuthner, 1920-1924.

Rorova 2015 — Rorova Irina. M. M. Vezhevsky's Expedition to Kucha (1905-1908) as a Step in Russian Exploitation of Cen-

tral Asia // *Tocharian Texts in Context. International Conference on Tocharian Manuscripts and Silk Road Cultures. Vienna, June 25-29th 2013*. Ed. by Melanie Matzahn, Michael Peyrot, Hannes Fellner and Theresa-Susanna Illes. Bremen: HempenVerlag, 2015. P. 187-198.

Stael-Holstein 1909 — Stael-Holstein A. v. Tocharish und die Sprache I // *Isisemua Ikm. 4H. Cep. 6*. 1909. C. 482-484.

Margarita Iosifovna Vorobyova-Desyatovskaya / ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所顧問。歴史学博士。レニングラード国立大学東洋学部インド学科卒業。ソ連邦科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部（現東洋古文書研究所）にて勤務。研究員、上級研究員、南アジア研究学科長を歴任。中央アジア出土の古写本を研究テーマとし、サンスクリットやチベット語、コータン・サカ語等の仏教経典及び世俗文書等の解説を行い、法華経研究でも多数の著書、論文を発表している。